

進路選択にまつわる自分史

片倉峻平（博士課程一年）

私は現在博士課程に在籍し、中国の古い文章や文字について研究をしています。現在の環境に至るまでは紆余曲折がありました。

少し遡ってお話をします。個人の思考系統を文系・理系で極端に分けてしまうのも短絡的かもしれませんが、私は中高時代、数学や理科の教科が得意な所謂「理系」サイドの人間でした。寧ろ国語や社会といった文系分野の教科はずっと苦手でしたし興味すら持っていませんでした。当時は勉強が好きではなかったため高校卒業後はすぐに大学には進まず途中で一度就職をしたのですが、その時はPCいじりが好きだという理由からネットワーク関連の機器を操作する仕事に就きました。これもまさに「理系」の仕事に分類されるものでしょう。そんな私でしたので、大学進学を志して退職した際も何も疑うことなく理系学部に進学するつもりで受験勉強を始めていました。しかし漢文科目の勉強中にとある文章を読み、文系学部への進学を目指そうと心変わりしてしまいました。

その文章は後漢～三国時代の人物をテーマにした逸話でした。本なんてものは雑誌か漫画しか読んでこなかったような中高生活でしたが、そんな中でも唯一読破した実績がある小説こそ吉川英治『三国志』だったのです。確か最初は友人に借りたデジタルゲームがきっかけだったと思いますが、そこから横山光輝の漫画『三国志』に進み、更に興味を深めて読み慣れない小説に手を伸ばしたわけです。例の漢文に出会った際に、この過去の自身の経験が突如クローズアップされ、「この人たちを勉強してみたい」と漠然と思い始めました。

結局そのまま東大に文科三類枠で入学し、慣れない「学問」に四苦八苦しつつもなんとか単位をかき集め、三国志の人たちを学ぶのだからと文学部の東洋史学研究室に進学しました。古代中国を研究するゼミに所属し、当時の人々についての正しい研究の仕方を教わりました。他方、中文や中思文（中国思想文化学研究室の略称）の授業も受講し、多くの漢文資料に触れる機会を得ました。そして、この時に大量の漢文資料に苦戦したことが、今度は中文研究室への転向のきっかけとなったのです。文章を精読しようとする際には得てして「この言葉はこの文章全体においてどういう役割を果たしているのだろう」という疑問を解消しつつ一步一步踏みしめるように文章と向き合う姿勢が求められます。漢文資料の精読を重ねていくうちに、記されている内容そのものよりも「この漢字の機能というのはどういうものなのか」という方面に興味がシフトしていきました。文法機能を学ぶのは東洋史研究室では相応しくないということでとうとう学科を変える決意を固め、多くの先生方のハンコを貰うことで中文研究室に所属を変更することを許されました。

こうして中文研究室の学生として学部を卒業し、そのまま修士課程も経て今では博士課程に在籍しています。中高時代の自分は、十数年後に大学の博士課程に在籍し中国語を研究しているなんて、全く思っていなかったことでしょう。様々なきっかけとそこからの選択により、現在中文研究室の一員でいられることに感謝しています。